

議事要旨(3) 2016年7月開催会計基準アドバイザリー・フォーラム（ASAF）の報告

川西常勤委員より、2016 年 7 月開催会計基準アドバイザリー・フォーラム（ASAF）の状況について報告がなされた。

報告に対する委員からの主なコメントと、それらに対する事務局からの回答は次のとおりである。

概念フレームワーク

- ある委員より、次のコメントがあった。
 - 蓋然性規準については、どこからも支持がなかったようだが、蓋然性規準は必要ないとする理由の説明はあったか。

これに対して、事務局より、次の回答がなされた。

- 公開草案で提案されたロジックを支持するということである。つまり、蓋然性が低いけれども認識されているデリバティブなどが定義に含まれるようにして、それらが当該定義にしたがって認識できるようにするということである。

のれん

- ある委員より、次のコメントがあった。
 - のれんの減損については、少なすぎ、遅すぎにならないようにすること及び簡素化することが常にいわれているが、それ以上のことが何か話されたのか、また、今回の調査との関連で何か話はあったか。

これに対して、事務局より、次の回答がなされた。

- IASB スタッフとしては、ここ数カ月 IASB ボード会議で議論している PH アプローチを使うことによって、少なすぎ、遅すぎという問題に対処していくとともに、コストに懸念があるなら、それを軽減する方法を組み込んでいきたいと考えているようである。今回の調査については、償却に賛否がある中でできるだけ客観的に情報を出そうとしたため、この調査で償却の是非の結論を出そうとしたわけではない。のれんの残高が少し大きいと思っている人たちからすると、少なすぎ、遅すぎにつながっていることになるが、IASB スタッフは、のれんが爆発的に増えているわけではないことが確認できたとしており、この調査からは、それ以上のことが導かれるわけではない。

- ある委員より、次のコメントがあった。
 - のれんが爆発的に増えているわけではないという発言があったが、世界の累計としては、そうかもしれないが、巨額ののれんを取得する企業は限られているので、過

去に M&A を複数回行っている企業や新規に M&A 戦略を取り始めた企業を取り出して調査することも有用ではないか。

これに対して、事務局より、次の回答がなされた。

- 調査報告では、最初にのれんの分布が偏っていることを提示している。大きな残高を持つ企業は、M&A をビジネスモデルにしているような比較的少数の企業に限られているという調査報告もあり、そういった企業の買収が失敗すると巨額の減損が生じることになる。実際には多額の減損は計上されていないが、それは事業がうまくいっていることを意味しているとは限らず、単に表に出てきていないだけという懸念もある。特定の業種又はビジネスモデルをとっている企業が非常に危険な会計処理を行っているのではという指摘が IASB 理事からもあった。

- ある委員より、次のコメントがあった。

- のれんは、永遠に続かない、耐用年数があるのはおかしいとフランスが主張しているようだが、逆にのれんは永遠に続くとする根拠はあるのか。企業に寿命があるように、のれんにも寿命があって当たり前ではないか。
- のれんの分布にはばらつきがあるので、M&A 戦略をとっている企業と自ら事業を育成している企業とを分けた方が比較可能性を得られるのではないか。

これに対して、事務局より、次の回答がなされた。

- フランスは、のれんは減耗しない資産であるから寿命はないはずという立場をとっている。企業に寿命があるのに、特定の資産には寿命がないということは考えづらいが、償却しないことについては、土地なども同じであり、それと同様に考えているかもしれない。
- 財務諸表の利用者は、M&A をする企業としない企業とで分析の仕方を分けて考えているといわれているので、両者の比較可能性については IASB ではあまり考えていない。

- ある委員より、次のコメントがあった。

- フランスでは、のれんを超過収益力とは定義していないのか。

これに対して、事務局より、減耗しないと主張している方々は、のれんを超過収益力とは定義していないと考えられるとの回答がなされた。

その他

- ある委員より、次のコメントがあった。

- 開示原則プロジェクトの進捗について何か話はあったか。

これに対して、事務局より、特段なかった旨の回答がなされた。

以 上